

令和 7 年度（2025 年度）
京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題
日本音楽研究専攻 専門語学 現代文

下の文章は、上野堅實著『尺八の歴史』（島田音楽出版）の「まえがき」の全文で、8つの段落
（(1)～(8)）から構成されています。よく読んであとの問いに答えてください。（掲載にあたって原文
を一部改変しています。）

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

問1 傍線部(①～⑩)には、「これ」「それ」などの指示語が含まれています。それぞれの傍線部が文中で何を指しているか、簡潔に答えてください。

問2 段落(2)に「本格的な尺八にかんする通史は、現在存在していない」(波線部)とありますが、著者は、その理由をどのように考えていますか。段落(1)から段落(3)までをよく読み、著者が考える理由を、2つにまとめて説明してください。

問3 著者は、段落(4)と段落(5)において、これからとりくむべき具体的な課題を、複数あげています。どのような課題か、箇条書きにして示してください。

問4 段落(7)の二重傍線部「社会史的な観点」とは、どのようなところに目をつけることを意味していますか。段落(7)をよく読んで、説明してください。

問5 段落(1)に「神聖視する立場」(破線部)という表現があります。この立場から脱却するためにとるべき学問的手続き(あるいは手段、方法、立場)は、段落(6)に示されています。どのような学問的手続きですか。

問6 本文全体(「まえがき」)から、上野堅實著『尺八の歴史』全体がどのような本であるか、想像できると思います。その想像にもとづいて、本書『尺八の歴史』の内容や特徴を、簡単に紹介する文章を書いてください。(分量は200字以内で。)

江戸時代中期の浮世草子（当時の風俗や人情の諸相を描く娯楽性の濃い文学）作家、多田綱恒による『鎌倉義経袖日記』（寛政三年（一七四二）刊）は、浄瑠璃の外題『鎌倉袖日記』をふまえ、源頼朝にたいして臣下たちが代わる代わる面白いエピソードを語る、という設定で書かれた作品ですが、それぞれのエピソードでは当代（江戸時代中期）の世相が語られていて、頼朝の臣下たちのはるかに遠い未来の出来事を見たこと聞いた事として語るのが作品全体のコンヤブトとなっています。次の文は、その作品の四々巻の一話です。通読してあとの設問に答えなさい。

原文は長文のため所々省略しています。省略箇所は、■で示しています。（ ）内、および注は出題者によるものです。

① 浄瑠璃物真似も年功のいひ立

④ 〽「仲義歌は、神代の古風をうたひ物にしたる物にて、■「長き御代を、いむひたる物が、一塵して権馬衆となり、今様朗詠しをり萩の雅なる章韻も、かはればかはる物にて、信濃前司とかやが作りたる平家物語りにふしをつけて、望一といへる板東座頭がなまりちらして語りそめしより、ところろくは喉につまるやうなるを、伝事とさだめ候けるぞやの、■ひづみたる琵琶の撥音、ばらりんくとは是を此世のたのしみと、かなりがけに食物のある隠居もあれば、■称名鉦はり講と名づけて、大なるたしき鉦を台へかけて、クラックと調子にかけ、拍子をあらそふ仲間もあり。

⑤ 世はさまぐの内に、難波の北に大瀬屋の入彦、あとも八右衛門といへるは年いまだ卅一二才。いつの頃よりか唐音を稽古し、よき若衆を見ては「好童子、よき女をみては「好女子」、「さんけんのんかんがん、よんくんはんもんつてんこんいん、ひやろにうきやらい」などいふてくらし、朝から晩まで雑守の念経きくやうに、近所からも噂言の八右衛門と異名せらるゝほどなるに、其隣は紅屋の太郎右衛門と云て、年つもつて七十三歳。■生れつゝめて願好にて、盆になれば白髪をぬり、若やき打ぞめひて、夜のあくるまで「そつこでせい、まかせてせい」トやあとな」をしやべりありき、町の参会に出て、■「いづれも酒がしゆんで、仕舞にうたひがはじまれば、■扇をかざして声はり上、大むかしの役者のせりふ、■ぬけたる歯よりすか／＼いふて■興をさませば、大茶屋にての参会なる故、仲居むすめ共はわりもあせず、おもしろかるべきやうもなくて、■「ト十年もとしが若ければ、此物まねで一座のおなじ共もひた／＼となひけてみせるに」といへば、茶屋の姉共が「今でもじやわいな」といふたは、たしかにきよくことばとは聞ながら、どこやらそこ／＼うにかゝつて、そのあくる日より、七味匂ひ歯みがきを買ふてきて、六七枚のこりし歯をみがき、はげはてしなき鬚髪に床髪ゆひたのみてかけがみをかけ、■「おどりと物まねで色をとる気にて、めつきりと金をつかひ出し、夜どまり日どまり身上天相応のおこり。

一門一家もてあつかひ、たび／＼意見しても得心せず。跡つぎの養子親太郎八もこまり入て、夫婦して「金をおつかひ被成るゝ事は申ませぬが、■「おどりと物まねはやめになされて下されませい。■」と、しみ／＼とくどげば、■「踊り物まねをわびごとしければ、「しからは年より相応に淨るりに致ふ」と、■「うがひしなからもかたり、早もこうじて来て、床へあがつてやつて見たい心になり、養子親にかくし、■銀三百目出して、座摩の社内である隠古浄るゝへ毎日／＼かよひ■けるを、養子親とかく迷惑がり、となりの隠居人斎老へ、「おまへ様は御美体なおやご様で、さぞ御子息様の安堵なぞるゝでござりませう」といへば、「イヤ／＼古は色かめるでござる。手まへはまた併が美体すぎて簡ひがうすく、代々の得意ものいゝてめいわくいだす。其子細と申は、手まへは■「薪間屋ゆへ、土佐阿波くまの方々より船がつゝめて、荷主と申すは船人衆でござる。■「むつかしいあしらいたせば、いたみいつて返りうがきうくつになる故、■手まへの家では、むかしから茶湯はなし歌はなし、さけの上でも小うたひ、かた／＼法度にいたしおゐて、もしや有がいれば浄瑠璃の道行かおどりとくどきでなければまいらず。そこもとのおや御太郎右衛門殿をこちらの養子に致せば、大ぶん客のつく事でござるに、きのどくなは傍八右衛門。すこしばかり論語のはしでもおぼへるといなや、■「荷をおくる国々から傳船してのぼる医者や出家衆をみると、詩をつくりかけ、■「たま／＼和讃せらるゝ衆あれば、何やら口の内では「ふんくわんでゐりやんらん」など、／＼いふてみて「是はうたははれぬ」と恥をかゝせ、■「御客様方買物取次帳」といふを、海客買物録と書て、下に朱印をおしておくゆへ、船人衆は、「もつたいない真言寺の御礼さうなが、帳の表紙には何として御かけなされた」とおがむ衆もござるに、その客衆を「無文酌の漢」とあざける故、次第にきびしう成て、きのどくに御座るが、■「唐音つかふてわが居る日本を文直な国にやなど、高ぶる様なやまひは、たいてい事ではいゑますまい」と、涙をながされける折ふし、夜もや／＼ふけて、■「太郎八かへりしに、間もなく「いねんゆうこういねんちゆん。くついぎちんべついちん」と、うたふてもとるは併めならん、■「「だき／＼問屋のぶんさいで、唐人ことば聞たふない」としからるれば、「是は唐人口ではござりませぬ。おやご様も長崎へ／＼つてお聞なされてござらうじませい」と、口ごたへして寝たるよし。上がたのあきんどがはなしました■」と庵原左衛門かたらける。

- ①【かなりかけ】 一通りであるさま。どうかこうにか、の状態。
- ②【称名鉦はり講】 直径二尺程度の鉦「双鉦（そうばん）」を打ち鳴らしながら節付け念仏を唱えることを信仰の行とする人々の集まり。双鉦念仏は、明応四年（一四九五）、祐崇が京都の真如堂（真正極楽寺）の大衆とともに宮中において引当念仏を修し、その後勧誘を得て鎌倉の光明寺に移修したのが双鉦念仏の始まりといわれている。ちなみに、鉦を打つことを「鉦をはる」という。
- ③【大灘屋の入齋】 大灘屋とは屋号か、もしくは海運業を営む店の意味か。いずれにしても本文からわかるとおり、薪材を扱う船問屋（船宿を兼営）、その店の隠居老人。
- ④【唐言】 中国語の唐音。あるいは中国語。
- ⑤【紅屋】 紅（べに）やおしろいなど化粧品を売る店をさす江戸時代の呼称。
- ⑥【そっこでせいゝ】 盆踊り歌の囃しことば。
- ⑦【床髪ゆひたのみてかけがみをかけ】 床髪結とは、江戸時代、簡単な屋台で理髪を業とする移動理髪店。または、その職人。髪結床。かけがみは、付け髪のことか。
- ⑧【水】 人形浄瑠璃の舞台の上手（右手）に設けられた、太夫（たゆう）と三味線唄きが義太夫節を演奏する場所のこと。あるいは、単に演奏する場所。
- ⑨【座摩の社】 東津国一之宮の座摩（いやすり）神社。現在の大阪市中央区久太郎町四丁目に鎮座。
- ⑩【実体】 まじめで正直なこと。また、そのさま。実直。
- ⑪【浄瑠璃の道行かおどりくとき】 道行とは、浄瑠璃・歌舞伎などで、舞踊で表現される相愛の男女の駆け落ち、情死行などの場面。おどりくとき（踊り口説）とは、おもに盆踊りや歌われる、長編の叙事的な歌。盆踊りの場合は、主として童謡取（おんどとり）が独唱し、踊り手は囃し言葉を唱和する形式となっている。
- ⑫【荷をおくる国々から船給してのはる医者や出家衆】 土佐、阿波、熊野などの出家地から運搬船に便乗してやってくる医者や僧侶。
- ⑬【和韻】 漢詩で、他人の詩に和し、同一の韻を用いて詩を作ること。原作と同一の字を同一の順に用いる次韻、順にこだわらずに用いる用韻、同一の韻に属する他の字を用いる依韻の三体がある。
- ⑭【庵原左衛門】 庵原（庵原、葦原とも表記）氏は、古代より続いた駿河国の庵原郡の豪族。『古事鏡』には、桓原京時の乱において「葦原小次郎」が葦原六郎・八郎を討ち取ったこと（正治二年「一二〇〇」）、そして、建長二年（一二五〇）の開院の里内裏造宮に従軍する義孝（臨時の工事担当者）の持ち場担当一翼に「葦原左衛門入道」の名がみえる。

設問

- 問一 ㉔ このエピソード全体を源頼朝に語っている人物は誰ですか？
- ㉕ その源頼朝に語っている人物は、第二段落㉖以降の話有谁から聞きましたか？
- それぞれ番号で回答しなさい。

- ① 太郎八 ② 八右衛門 ③ 庵原左衛門 ④ 紅屋の太郎右衛門
- ⑤ 船人衆 ⑥ 上方の商人 ⑦ 称名鉦はり講の仲間たち ⑧ 大灘屋の入齋（隠居入齋老）

問二 第一段落㉔は、導入部といえる段落で、日本の音楽（歌いもの・語りもの）を古いものから列挙していますが、第二段落以降の話の展開にそれほど影響していません。この段落が設けられている意図、あるいはその効果について、この作品全体のコンセプトと関連つけて述べなさい。

問三 傍線部「今でもじやわいな」は、太郎右衛門のどんなことに対するお世辞ですか？ また、このようなお世辞をいわれた太郎右衛門は、どのような行動にでましたか？ 簡潔に述べなさい。

問四 船人衆には理解されにくい芸事・芸能としてあげられているのは次のどれですか？ 番号で回答しなさい。（複数選択可能）

- ① 踊り口説 ② 和韻 ③ 茶の湯 ④ 小謡
- ⑤ 物まね ⑥ 浄瑠璃の道行 ⑦ 和歌 ⑧ 唐音

問五 八右衛門の行動として、正しいものはどれですか？ 番号で答えなさい。

- ① 店の帳簿の表紙には「海客眞仙録」と中国語風に書き、その意味を理解できない客を「無文銭の漢」といって嘲う。
- ② 美青年や美女をみかけると「好妻子」「好女子」などと声をかけ、交際を申し込む。
- ③ 一緒に和韻をする相手を探している。
- ④ 長崎に行って、中国人に唐言の指導を仰いだこともあった。
- ⑤ 禅寺に通い、僧侶の講經を聴いて唐言をおぼえた。

問六 この作品から感じ取ることができる、江戸時代中期の庶民における、趣味・教養・習いごと事情について、自由に意見を述べなさい。もちろん、フレイクシヨンですから誇張して描かれているのは当然のことですが、ここではその点をあまり考慮しなくてよいこととします。

令和 7 年度（2025 年度）
京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題
日本音楽研究専攻 専門科目
筆記試験 B（小論文）

問

音楽・芸能の研究において、「比較」という方法がもっている有効性（メリット）について、具体例を示しながら、説明してください。また「比較」という方法に潜む学問上の危険として、予想できることがあれば、合わせて説明してください。（分量は自由です。）